７月例会報告

ＰＴＡはいったい何のためにあるの？

【小倉きよ子さんのお話】

私がＰＴＡに関わったのは第一子が根木内小に入学した時で、そのとき学校から保護者全員に配られたのが、千葉県のＰＴＡ連絡協議会で発行していた「ＰＴＡのてびき」。（発行年度は昭和４５年３月１０日）この手引きは何年間か、千葉県全体に配られているはずです。非常に民主的な考え方で、やさしく親たちにＰＴＡ活動とは何かということを示していると思う。ＰＴＡとは何するところかわからない時に、これはとても参考になりました。その後これをもとにして、もう少し根木内の地域に即した内容で、もう少し具体的に展開した、根木内小ＰＴＡの手引きづくりをしました。

松Ｐ研を一生懸命やっていらした、松Ｐ研の生みの親とも言うべき　　田辺倭文子さんは、「子どもや教師にとって、ＰＴＡというのは見過ごすことのできないとても大事な活動である」ということを身をもって示してこられた方です。ＰＴＡ活動の中身を皆に知らせるために、手を尽くして資料を集め、それを配り、そのことについての学習会を毎月組んでくれていました。私が子育てをしているときは、その田辺さんの活動の最盛期で、松Ｐ研の具体的な活動が始まったころでした。毎月１回から２回定例会を持ち、その頃　親たちは教育問題に燃えていたというか、子どもたちをどう育てるかと考えている時にいろいろな社会的な状況が出てきて…。

たとえば、テレビをどうやって見せようかしらという問題とか、大人向きのいろんな風俗誌が子どもたちの立ち寄る本屋さんに並んでいて子どもたちにとって良くないのではないかとか、子どもたちをいい子に育てたいという非常に素朴な親の思いを持ち合わせていた時期だったのかもしれません。こういう問題が、松戸中のあちらこちらで話し合われていたと思います。

このように、親の愛情から発したところから、学校教育の問題にも関心が向いて、学校教育がこれでいいのかなあと思って見ているうちに、さまざまな学校の矛盾に気がついてきます。一つ一つ自分の目で見たり、感じたりした矛盾をどうしようかというところ思いが発してきて、そんな時田辺さんという優れた水先案内人がいて、「それはこういうところに原因があるのよ。こういうところを勉強しなければそれはわからないのよ。こういう行動をしなければとそれは解決しないのよ」というように、皆を引っ張っていってくれました。それでＰＴＡ活動が本当に軌道に乗っていきました。

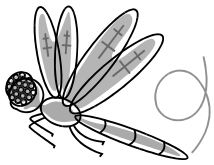
自分の子どもの問題と歴史の歩みというのは、
どこかでいろいろな影響を受けながら進んでいる

戦前の軍国主義教育から戦後の日本の教育をどういう形で作りあげていくかということで、ＧＨＱなどが非常に真剣に討論していたらしいです。その時に、アメリカのＰＴＡの組織というものを日本に持ってきたらどうかと議論されていて、それを文部省は参考にしながら新教育指針などを作りました。そしてその頃、日本国憲法が公布されているんです。日本国憲法が公布される前に、日本の教育を考えていかなくてはならないからＰＴＡが必要だということが提言されているわけで、ＰＴＡって本当にとても古い歴史を持っているのだと改めて

思います。そういう経過の中で 1947 年に文部省は、父母と先生の会というものを全国的に作っていこうということで、『教育民主化の手引き』を出しました。これは非常に具体的に平易な日常的な言葉で、懇切丁寧に書いてあります。文部省では前の教育に対する反省、全国的に帝国憲法によって国家の支配による教育が行われ、そのために皆が軍国主義一辺倒になったということへの反省、それが深く深く人々の心にしみこんでいて、それを払拭するのにどうしようかという苦労があったと思います。そのためにどの人にもわかりやすい言葉で表現しようとしたのだと思います。ぜひ読んでみてください。そこには、教育って何だろう、子どもを育てるためには何が必要なのか、そのために父母と先生が教育をめぐってしっかり話し合っていかなくてはならないということが具体的に書いてあります。そのために父母と教師の会を作っていきましょうと。
そうして、ＰＴＡは 1 年くらいの間に全国的に作られていき、親たちは、自分も教育に参加できるのだと生き生きとＰＴＡに参加していきました。

それが､個人の人権や労働者の権利などについて国民の意識がドーッと高まってきた時に、今度はアメリカが日本の民主化のスピードのあまりの速さに警戒感を持つようになりました。朝鮮戦争が始まるという社会的な状況の変化もありました。労働組合運動が非常に進んできて、国家権力は日本中が赤化されるのではないかと非常に危機感を持ちました。それでレッドパージが始まりました。さまざまな締め付けが始まっていき、それが教育の場にも及んできました。国民の自治をしようとする意欲にブレーキをかけるように、教育制度がどんどん変わっていきます。国民の気がつかないようなところからどんどん後退させられてきて、憲法制定の理念もその頃から後退が始まり、それが現在の憲法「改正」につながってきているわけです。

自分の子どもの問題と歴史の歩みというのは、どこかでいろいろな影響を受けながら進んでいるのだとわかっていただいて、歴史の勉強もしていただけるといいなぁと思います。



せっかくそこに皆で話し合って学び合える場があるのに

今子どもを持ち、学校に通わせているお母さんたちの気持ちが私には良くわからないんです。社会的な状況から見て、いろいろな子育ての悩みは山ほどあるのに…犯罪に結びつくものがいっぱいあり、命にかかわる問題がたくさんある。文化の面で言えば、子どもの情操を丁寧に育てていくという環境は無視されてきて、刺激の強いものがどんどん与えられてきている。食生活から見ても、子どもの体を作っていく基本的な食糧の問題がなおざりにされ、家庭で料理して食べさせてもらっていない子どもも結構いる。学校給食も民間委託が進んでいる。経済性というものが優先されてきている。添加物の問題、農薬・化学肥料の問題。原材料についての吟味がされなくなっている。

それにもかかわらず、少子化の中で子どもたちは過大に保護されてきている。保護のされ方、大事にされ方が子どもの本質にとっていいことなのか、逆効果なのか、今まだ良くわかっていない。社会的にも、親の中でもあまり議論がされていない。

自分の子育てに自信を持って育てているというよりは、いろいろ迷いを感じながら数少ない子どもたちを思いだけはいっぱいになりながら育てているのかなぁと思う。

そういういろんな問題について、親や先生たちは語り合っているのだろうか。あまり語り合っているように思えない｡語り合えないまま､悩みをどのように処理しているのだろうか。あまり処理されていないようだが､処理されていないことへの不満の声もあまり聞こえない。

私は、子育ての時期、どんな問題でも皆で集まって話し合ってきた。自分たちの中で解決できないことは、松Ｐ研に来て皆で討論しあい、その中から答えをもらってきた。単Ｐの中にあっては、その機能をしているのが学級ＰＴＡ。今、いろんなＰＴＡで、学級ＰＴＡがちゃんと機能しているのか。せっかくそこに皆で話し合って学び合える場があるのに。学級ＰＴＡをどう活用しているのだろうか。

教育は自己責任で行うような問題ではない

手間ひまかけてやっていくということが、社会的に失われてきていることが、今のＰＴＡをめぐる一番の問題点だと私は思っている。それを顕著に感じたのは、松戸の教育改革という、子どもに直接かかわる問題についてＰＴＡの中で話し合いが行われていなかったということ。話し合いが行われたところもあるけれど、話し合いをしようとする親たちのほうが疎外され、浮き上がってしまう。子どもの教育にとって一番重要な教育改革の問題について話し合わないＰＴＡっていったい何だろう。職員会議の中でもあまり議論されない。本当に不思議で仕方がない。松戸でどういう教育を行おうとしているのかという、一番身近な教育の問題を学校の中で討論されないということがありうるのだろうか。本当に、討論されないんですね。ＰＴＡの連合体であるＰＴＡ連絡協議会でも問題にもされない。こうした松戸全体の異常性について、これは大変なことになっていると私は感じました。

「自己責任で子どもを育てるから放っておいてよ」という風潮になっているのかもしれませんが、教育は自己責任で行うような問題ではない。国の教育政策があって、その中で、子どもたちは教育を受ける権利があって学校に行っているわけですから、その権利の問題がうやむやになってきているのではないでしょうか。それと期を一にして教育基本法の「改正」の問題が出てきている。「私たちの命・心・生きるということを守ってくれるのが憲法と教育基本法である」ということをＰＴＡや松Ｐ研の活動の中で教えられながら生きてきた者として、そういうことをあまり考えないで過ぎてきている松戸の現状にとても絶望しましたし、これで子どもたちいいのかなぁと心配になってきました。

ＰＴＡというのは、子どもを育てる親にとっては、話し合いの場を保障する一番大事なところ。親と先生が対等に話し合える場所なんです。だからここで、親も先生たちも本気になって、平場の気持ちで何でもしゃべりあっていけばいい。しゃべりあうことの中で英知が集まってくる。そういうものを実現していくことができる組織がＰＴＡ。私はこれをもっともっと活用していってもらいたいと思っている。そのためにＰＴＡに対する拒否感を克服していく必要があるけど、どうしたらよいか。学級ＰＴＡで話し合うことで充実感を感じるとか、質問したことに答えが返ってくるとか、そのことで何かが見えてくることで達成感を感じる、そういう喜びをみんなで重ねていけば、またＰＴＡも蘇ってくるだろうか。

【フリートーキング】

■ 今は保護者会という形で、ＰＴＡ主催の懇談会ではないです。

■ 先生たちもＰＴＡについてよく認識していないですね。先生たちの認識が深まれば、学級懇談会の持ち方についてきっちりできるんですが。先生たちもＰＴＡとは何かを学ばないで先生になってきている。学んだ人たちも、何となく親と話すことのわずらわしさを感じていることが多い。今は、職員会議が単なる伝達機関になっていて、学級懇談会

も学校行事や学校の方針などを伝える場としてしかとらえていない。学級懇談会は、子どもの問題・教育や子育ての問題、社会的な状況などいろんな問題について、不満・不安・心配事なんでも出し合って話し合うところだということを、もう一度再構築していかないと。

■ 親たちも一人ひとりにされているし、経済的な問題を抱えている親が多いので、たとえば「朝食をちゃんと作らなくてはいけないよ」ということだけで引いていく。そういうことで本当のところの話は避けなければいけないような。

■ 6 年生のクラスでＰＴＡの委員を決めるのに、くじ引きで欠席裁判のようになっている。だから私は広報委員を引き受けました。私は今年小学校ＰＴＡ最後の年なので、そこで何ができるだろうかと考えました。まず広報委員会の中で話し合いをしたいなぁということと、私がＰＴＡの中で学んだことを何とか伝えて、ＰＴＡでいろいろなことを学んでいけるのだということだけでも残していきたい。古い歴史を持つ学校で、何とか民主的なＰＴＡを作ろうと取り組んできた経緯を知っている人がほとんどいなくなって、それをどうやって伝えていけばいいのか…。卒業式についても、校長先生相手に私たちは闘った。それまで対面式で行っていた卒業式を、「教育改革する」と言う校長一人の考えで変えようとした。私たちは校長先生に、「職員会議で話し合ってほしい」と求めました。そうしたら、「職員会議は内密のことだから、親の言うことを聞く必要はない」と答えました。「卒業式は最後の授業参観」と校長先生みずから言っているのだから、それならば親としても意見を述べたいと。しかしはぐらかされてしまいました。

私たちはＰＴＡ活動をするのに、憲法と教育基本法を盾にしました

■ 私たちはＰＴＡ活動をするのに、憲法と教育基本法を盾にしました。憲法や教育基本法で保障されていることについて、教育委員会や校長先生はこれを否定するのかと。そうすると、相手はそれ以上ものが言えなくなってしまいます。

■ ＰＴＡ運営委員会でアスベスト問題を出したら、校長先生は「教育委員会が危険性の高いところから順番にやっているから、その順番を待っている」と答えるだけでした。ＰＴＡとしては何をしたらいいかということを聞いたんですが、「ＰＴＡの名前で要望します」と。それだけで話が終わってしまう。見ると、アスベストがむき出しになっているところもあるんです。そのことを私たちはぜんぜん知らされていないんです。それから、ＰＴＡ会費を学校がねらっているなぁということも感じられます。校内でやっている合唱コンクールを今まで体育館でやっていたのですが、今年度から森のホールでやるようになりました。その会場費をＰＴＡで負担した。

■ 学校行事にお金を出すんですか？

■ 部活動費もＰＴＡからお金を出している。部活動はクラブ活動の代替。学校がやるべきことを部活動として時間を当てて、それを長く引き伸ばしているだけでしょう。それを全部個人費用でまかなうのは大変。だからといってＰＴＡでそれを負担するのもおかしい。部活動のあり方を考え直す時期に来ている。

■ 公立の学校で、子どもたちが希望して入る部活動に、そんなに多額のお金をかけなくてはいけないのか。いつも学校で着ているジャージで大会に出られないのか。それは個人でかかるお金だけれど、それ以外にＰＴＡで 70 万円も出している。

■ 父母の負担で生徒会費を払っていますが、そこからも部活動の費用が出ていますよね。

自己負担、ＰＴＡ会費、生徒会費、それに税金。4 重の負担ですね！

■ ＰＴＡ会費の使い方で、子どもに関わる還元のしかたはどうなんでしょうか。

■ 本来ＰＴＡは直接親である会員に還元することによって、間接的に子どもに還元していくというもの。親が学んでいく機会をたくさん作っていくということが還元の仕方だと思う。

■ ＰＴＡ予算の中から学級費が出ていますが、それを子どもに直接物を買うという形で使わないようにと言われていました。学級行事の際の参加賞とか。

■ 文化委員会主催の講演会を、3 年前から生徒も一緒に参加する講演会にしています。学校主催の生徒のための講演会が開かれなくなっていて、だから子どもたちにもぜひ聞かせたいと言う思いでやっているんです。親だけの講演会というと、最近は踊り教室などになってしまって、そのへんが難しい。

■ 学級懇談会も先生主催の懇談会という感じになっている。ＰＴＡ主催の学年懇談会をやっていますが、昨年は 2 回開きました。学年単位で先生を交えた懇談会をして、少し話し合いが深まったと思います。そういう話し合いで壁になるのは、先生がとても警戒するということ。前もってどういう意見が出るかを知りたがる。でもやらないよりはいいかな。

■ 私がとても感じるのは、みんな自分の持っている権利を知らないということです。お母さんたちと話していると、とても学校に遠慮しているということを感じます。自分の持っている権利について、もっと学んでいかなくてはと思います。

ＰＴＡへの基礎的な認識が共有できていない

■ ＰＴＡがあるにもかかわらず、機能していない。どこから手をつけていけばいいのか、わからない。2 年間役員をして、話し合う運営委員会にしようと思ったのですが、私一人だけからまわりしている感じで、結局変えられませんでした。今度は皆と手を組むことから始めようと思って、今はクラス委員をしています。学級懇談会が親同士の話し合いの場になっていないので、茶話会という形で何回もやろうということを考えています。

■ 皆不安で問題意識もあるんだけれど、個々に勝手にやっているので価値観がぜんぜん違う。一緒に子育てできない状況になっている。互いの価値観の違いを認識しても、そこからどう解決していこうかというのはかなり大きな課題です。こういうことは親同士が話し合って、解決しなくてもいいから　価値観が違うということはわかったほうがいい。地道にやらなくてはだめだなぁと思っています。

■ ＰＴＡへの基礎的な認識が共有できていない。話し合いの基礎ができていないから、個々にバラバラに意見を言い合って終わり。自己満足のＰＴＡという感じで、どこにも子どもが介在していない。ＰＴＡとは何かという原点からはじめていかなくてはいけない。

■ 皆いろんなところで勉強しているし、インターネットなどでいろんな情報を持っているけど、一生懸命だし、でも話し合ったことのない人たちが多い。自分で解決しなくてはいけないと思っている人も多い。話し合いの醍醐味を味わう前に、ドロドロとした関わりは嫌だなという感じ。私は自分の学校のＰＴＡが好きだし、いいＰＴＡだと思っているし、私もＰＴＡで育てられたと思うから、皆にも何とかＰＴＡでいい思いをしてもらいたいと思っている。ＰＴＡを変えようとか、会則の勉強会しようとか、いろいろやったけど、今やっている広報とか、今いるクラスとかで話し合えて、思いを共有できたり、

先生とコミュニケーションが取れたり、いい広報紙ができたり、そういう思いを残していきたい。

■ とてもいいＰＴＡだと思っていたのに、期間限定の小学校の部活にＰＴＡ会費から飲料水を出すんです。部活用のユニフォームの時には、「これは学校の教育の一環だ」と言って何とか食い止めたのに。「それは学校のことだし、部活をやっているのは一部の子だし」と反対したのだけれど、反対したのは私だけ。「何でそんなに反対するのか。学校の名を背負って朝から晩まで一生懸命やっているのに」と言われるんです。

■ 私は子どもが障害を持っているので、1 年生のときから学校へ付き添いで行っているので、中から見えてくるものがある。子どもが危険な遊びをしていたり、汚い言葉を使っていたり、傘が折られたり…。運動場の端っこで起きていることを先生はぜんぜん知らない。知っていることでも親にはぜんぜん話さない。保護者会では通りいっぺんの話で終わっている。保護者の方が参加しなくなってきている。

■ 昨年度末の話だが、校庭でボール遊びをしていた男の子がボールを追いかけて門から道路に出て行ったところを車にはねられて死亡するという事故がありました。とてもショックでした。4 年生が飛び出していったということもショックでしたし、裏門が閉まってなかったということもショックでした。親も何かできたのではないかということで、学級代表の人たちが集まって何回か話をしたらしいです。今までのような形だけの学級代表ではなく、親と学校の間を取り持てるようなパイプ役になっていきたいという話になったそうです。私も以前からそういうふうに思っていたので、今年は学級代表に立候補しました。でもここ 4 月 5 月と私一人から回りしているようで。今は潜伏期間中。

■ 一度なくなったＰＴＡを作り直すというのはとても大変だし、みんなの意見をまとめようと思っても、皆がなかなか前へ出てきてくれない。

良き策を弄せよ　そして　しなやかに　したたかに

■ 私は横浜の本牧小学校ＰＴＡがいいと思った。子どものことについて話し合いたい人たちがグループを作って…。

■ 会則の趣旨に沿った活動ならば、例えば講演会を開きたいということならば、それを企画・実施したいと手を上げた人でプロジェクトチームを作って実施する。あるいはＰＴＡ広報誌を作って発行するというチームを作ったり。

■ 役員も 3・4 人しかいない。その人たちは声を聞いてそれをお知らせする。本当に運営だけをする。そんな新しい形で、興味を持った。

■ ＰＴＡとしてのおおもとをしっかりと持っていれば、それぞれのＰＴＡのやり方があっていい。そのおおもとをどうやって皆で共有するかが問題。

■ 親の話し合うべきことと、それは子どもたちが生徒総会で話し合うべき内容とをきちっとわける必要がある。例えば制服の問題は生徒総会で話し合うべき。「体育祭の後に学生が打ち上げをしたがおかしいのではないか」とＰＴＡ総会で発言した方がいたけど、それは生徒総会で話せばいい。

■ そういう意見が出たときに、それは子どもたちの自主性、話し合いに任せましょうと発言する人がいれば、その人はそれを学んでいける。気がついた人が気がついたときに発言することで、お互いに学んでいくしかない。

■ 現実には、「それは先生に言いましょう」という発言が出てきて、子ども

たちへの規制につながっていってしまう。

- それは親の教育力。そして親の教育力を高めていくのがＰＴＡ。
- 本当にそう。ＰＴＡは親が勉強できるところ。
- 昔　田辺さんがよく言っていました。「ＰＴＡ活動すると歯がすり減っちゃう」って。いろいろ我慢して、奥歯がすり減っちゃうって。誹謗・中傷もたくさんあって、電話の内容を録音しておくというくらいひどかったらしい。それにもめげずにいた。「教育の問題にしっかり取り組まないと子どもたちが幸せにならない」という信念があったんですね。
- 藤田恭平さんが「良き策を弄せよ」とおっしゃっていました。何かを獲得しようと思ったら、そのためにどういう手段をとったらよいか、どういう道筋をたどったらよいかについて、よく考え、良き策を弄しなさいと。私も賛同者を募るときには、一本気でドーッと行かないで、皆の共感を広げるための活動をしました。ＰＴＡってめげるためにやっているのかしらと思うほど、くたびれ果てちゃうでしょう。私や田辺さんたちの合言葉は「しなやかに、したたかに」頑張ろうでした。皆さんの発言を聞いて昔を思い出しました。皆が持って行き場のない思いを持って松Ｐ研に来て、皆が自分の悩みや思いだけをしゃべるの。それが 30 人・40 人の人たちが集まって、しゃべってもしゃべっても足りなくて、夕方暗くなってもまだしゃべっていたいなんていうことをやっていました。そういうことがとても勉強になったんです。学校は違うけれど、問題は違うけれど、それを出し合うことでどういう考え方をしたら良いかハッと気がつくんです。
- 先生も悩みが深いんです。だから先生と何でも話し合える関係を作っていく必要がある。事前にいろんな問題をどんどん先生にぶつけていって、回答をもらう。そういう訓練を日常的にやっていけば、いきなり懇談会で出してせっかくの問題提起が波紋を呼ぶこともないと思う。また波紋も必要。それは皆に考えてもらうチャンス。
- お母さんたちの反応は基本的に昔と変わらないかもしれないけど、今は食いつきが悪いんですよ。
- いかに食いついてもらうか？　本牧小学校ＰＴＡのように新しい形を模索するとか、装いをちょっと新しくするとか。
- 若い人たちはエネルギーもあるし、いい考えも持っている。ただ皆でやるということに慣れていないんだと思う。いろんな人のいろんな才能、いろんな見方を皆で出し合って、それがＰＴＡだと思う。
- そこをつなぎ合わせる人がいればいいのだと思う。原理原則を知っている人がそのつなぎ目になって、いろんな人の才能や意見を引き出せるといい。
- お母さんの力ってとても大きい。子どもを育てるということには大きなエネルギーを出せるのだから、そのエネルギーをいい方向に引き出すということがＰＴＡはできるんです。ＰＴＡが本当に機能していけば、素敵な地域ができる。子どもを持つ親は必ずＰＴＡを通過していく。その親たちがそこでいろんなことを学ぶことができたら、それは国家的な大きな財産になるはず。これまでだってＰＴＡで学んできた女性たちが松戸の歴史を作ってきたという側面があるんです。ＰＴＡの学び合いって本当に大事。皆さんがんばって。